



新十津川望郷会

会

報

第8号

第八号の発行にあたつて

新十津川望郷会会長
山本敬一郎

さわやかな初夏の季節となりました。創立に当った人たちが故郷とのきずなをどんなに大切に思っていたかを偲ぶことができます。

新十津川の輝やかしい歴史と伝統を思い起し、自信と誇りをもつて進んでいくことの決意を新たにしたいと思います。

礼申し上げます。

新十津川望郷会は、昭和五十年七月三十日に有志の方々が新十津川町当局とご相談の上、創立されましたのであります。本年の会則第三条には「本会は、誇り高き郷土新十津川町との所縁を心として常に精進し、その精神を子孫に伝えるとともに郷土との親交並びに会員相互の親睦及び共励を図ることを目的とする」とされています。

親睦団体としては異例のきびしい規定のように思われますが、当

時、創立に当った人たちが故郷のことを創立以来三十周年を迎えていたかを偲ぶことができます。このことは創立以来三十周年を

私たちも故郷を離れていても、新十津川の輝やかしい歴史と伝統を思い起し、自信と誇りをもつて進んでいくことの決意を新たにしたいと思います。

新十津川の輝やかしい歴史と伝統を思い起し、自信と誇りをもつて進んでいくことの決意を新たにしたいと思います。

新十津川町長
小畠莊一

深緑が爽やかな季節となり北海道にとりましては一年を通じ一番過ごしやすい季節となりました。望郷会員の皆様方には、常日頃、郷土新十津川町にご支援を賜り心から厚く御礼申し上げます。

昨年を顧みますと、自然の脅威を実感した年でした。九月八日に大型で強い台風十八号が本道に接近し、朝から一日中、強風が吹き続け、町内では、住宅や納屋などの屋根のトタンがはがれたり、車庫が飛ばされたり、また農家のハウスや農作物なども大きな被害を受け、本町全体で、総額約六億七千万円の被害をもたらしました。

あらためて、自然の脅威をさまざまと見せ付けられた思いであります。

さて、本町の基幹産業である農業は、昨年、天候にも恵まれ、農作物の生育も順調に進み、例年より早い豊穣の秋を迎えるはずでしたが、台風十八号の影響で、作物によつては全滅状態の農作物もありました。しかし、主作物の米においては、稻穂からもみが落ちる脱粒が生じましたが、数量の3%の品質は良く、数量も平年並みの収穫となりました。今年は、例年にない大雪で、雪解けが遅れ、農

望郷会報8号の発刊にあたり

激励の言葉をいただき、厚くお礼申し上げます。

また、十月に新潟県中越地方を襲った地震は、広域にわたり大きな被害をもたらし、特に全村民が避難した山古志村は、村を流れる川が数ヶ所にわたりせき止められ、その姿は、明治二十二年の奈良県十津川郷の大水害を彷彿させ、とても他人事とは思えない惨禍となつておりました。そこで、町内の諸団体やボランティアグループから淨財を提供していただき、十一月に義援金百二十万円を山古志村へお届けいたしました。一刻も早い復興を祈っております。

さて、本町の基幹産業である農業は、昨年、天候にも恵まれ、農作物の生育も順調に進み、例年より早い豊穣の秋を迎えるはずでしたが、台風十八号の影響で、作物によつては全滅状態の農作物もありました。しかし、主作物の米においては、稻穂からもみが落ちる脱粒が生じましたが、数量の3%の品質は良く、数量も平年並みの収穫となりました。今年は、例年にない大雪で、雪解けが遅れ、農

作業にも影響が見られ、半年に比べ遅れての作業となつております。今年は、自然災害のないことを願うとともに天候に恵まれ、豊穣の秋を向かえることを期待してやまないところであります。

近年の社会経済状況の低迷により市町村を取り巻く環境は非常に厳しい状況にあります。この行財政運営の難局を乗り越えるため、「行政改革推進委員会」を設け、行政改革の見直しについて検討を重ね、今年度を「行政改革実践年」と位置付け、公共施設の使用料や団体への補助金等を見直しました。

また、昭和四十九年の行政区画の再編成から約三十年が経過している現在、地域の世帯状況も大きく変化し、地域の自治活動が停滞している行政区もみられていることから、今年一月に行政区画再編成審議会を設立し、行政区画の再編成及びこれからの地域のあるべき姿を検討、協議し、三月に答申書を受け、その答申内容を基に十八年一月一日の施行に向けて、地域住民の理解を求めながら協働のまちづくりを執り進めております。

明るい話題として昨年、母村十

津川村の熊野古道が世界遺産に登録されることは、皆様ご存知と思いますが、その古道は、明治二十二年の新天地北海道に向かう移住民が歩いた道が含まれております。その歴史の重みを感じるとともに

今回の慶事を契機に全国初の「源泉かけ流し」を宣言するなど新たな取り組みが母村の今後の発展となることを願っております。

本年は、更なる飛躍の年となるように町民の皆さまのアイデアとともに個性と魅力のある豊かな「オンラインリーワンのまちづくり」を目指して参りますので、会員の皆さま方にも何か良いアイデアがあれば幸いと存じます。

最後になりますが、望郷会員皆様には今後とも更なるご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

月形を出ると、田園がひろがっている。

密林を伐り、木株をおこしてわずかずつ可耕地をひろげて行つたのが、あの十段の石段をくぼませた囚人たちであつたことを思うと感慨がただごとでなくなつてしまふ。

月形の北方に入植した新十津川のひとびとも、それをやつた。

新十津川を訪れた

司馬遼太郎(1)



新十津川望郷会会长
山本敬一郎

かれらの入植が冬であつたことは、いまここで想像するだけでもつらさが先立つ。

春を待つという贅沢がゆるされなかつた。

十津川渓谷で家をうしない、この地上に雨露を凌ぐ屋根をもたないひとびとにとつて、たとえ氷を割つても目的地に身をおちつけるほかななかつた。

たまたま現在の新十津川村の北

方の空知太に、百五十戸という多数の屯田兵兵舎が建てられたばかりで、二千四百八十九人はそこを借りて越冬することになつた。

昭和五十四年頃「街道をゆく－北海道の諸道」取材のため新十津川を訪れている。

望郷会にとつても大切な記録だと思うので関係部分を抜粋して紹介させて頂きたい。

この屯田兵の兵舎と類似のものが旭川に一戸保存されているが、板屋根に外界を隔てる壁は板張り一重という粗末なもので、家屋そのものが隙間風でできているようなものであつた。私は西洋のウサギ小屋というものを見たことがないが、西洋のウサギなら凍死するのではないか。

幕末、幕命によつて松前警備に行つた津軽藩士が初年度で大量に死んだことがあるが、空知太の屯田兵兵舎に借りずまいした十津川人も、最初の冬を越すうちに百人

ちかくが風邪や肺炎で死んだ。

私有地がくじびきで決められた。兵舎を出て、それぞれの土地に入つたのは六月になつてからで、このあと、密林をひらく作業でかけられた。初年度は三反ほどの平地をひらいて自家用の作物のたねをまくのがやつとだつたという。その作業も、まき付けの時期が遅かつたためにそばと大根だけであつた。

新十津川村は戦後、泥炭地を排水したり、客土して土地改良したりして、いまでは北海道でも有数の富裕な農村になつてゐる。このことは、月形を出て、新十津川村の村域に入るとわかる。沿道の学校の校舎もりつぱだし、どの家のたたずまいも、ゆとりがありそうにみえる。三反歩のそばと大根から出発したこの村が、ここまでやつてくるのに、九十年近い歳月がかかっているのである。

この村で、明治三十二年生まれの泉谷省吾氏に会つた。「冬は大変でした。明治四十二年ごろの話ですが、私は尋常（註尋常小学校）に通わんならん。学校まで一里あつて、七尺の雪がつもつていています。

朝、父親が足にカンジキをかけて雪を踏んでゆき、私はそのあとを歩いてゆく。午後も父親が迎えにきて、おなじようにカンジキで雪を踏んで帰る。冬の父親の仕事は、送り迎えだけで半日つぶれてしまうんです」と語ってくれた。

この話から、さまざまな感想がひき出せる。

札幌新十津川

郷友会の動き

札幌市



（前札幌郷友会 会長）

られました。
ご苦労の多い時代になると思いま
すが、ご奮闘を祈る次第です。

ご苦労の多い時代になると思
すが、ご奮闘を祈る次第です。

卷之三

新会長は 田嶋 和勝氏（大和会
会長）にその他役員は留任

相談役 上林天道 佐藤金雄

副会長 岡本一郎
高棹政義 増谷俊秀

監査 大久保宗利 薮内 毅 中島悠迪

・各地域会の動向

・新十津川郷友会中央会

会場 すみれホテル

木帆舟月会

会場 ホテル札幌会館
・さつぽろ大和会

日時 平成十六年十月十六日
会場 すみれホテル

・さつぽろ吉野会

平成十六年十月二十三日
会場 すみれホテル

総ての会に町長さんに出席をいたしました。厚くお礼を申し上げます。

追記

昨年初の試みでないかと思われる郷土産「ほしのゆめ」を食する機会を与えていただき有難うございました。久しぶりに郷土の産米に舌鼓を打ちました。

面白い発想ではないでしょうか。また、利用する機会があればと思っています。

私見を述べ恐縮です。



札幌市

高齢化と夫婦の健康 札幌新十津川郷友会

(郷友会中央会会長)

増 谷 俊 秀

高齢化がどんどん進み、平均年齢は女性八十三才、男性七十八才とか。古稀（七十才）の人など、ざらである。オジジ、オババとしての期間も又、長くなつたが、なつた、夫婦として生る期間が長くなりつた、夫婦五十年の時代である。若い時の希望を背負つて延々と喜ぶ人もいる。中高年になつて

から離婚が多いのも時間が長くなら、当然か？昔しならば自然な、お別があつたけど、今ではそれまで待ち切れなくなつた訳かな。昔から夫婦に関する格言や諺が山ほどあるのも、この夫婦というものの「山あり、谷あり」「晴れの日、荒れの日」が、いかに厳しいかを証明するものである。

こんな言葉がある。「二十代愛情、三十代葛藤、四十代怒り、五十代あきらめ、六十代感謝」 晩

婚化や、七十代、八十代の夫婦も多くなつて現状からすれば当てはまらない感じもするが、我が人生を振り返るに、まことに実感である。私としては「七十代八十代は助け合い」と行きたいところであるが、はてさてどうなることか。夫婦に対する感じ方は、夫と妻とは、かなり違うように思われる。たとえば「老後、誰と旅行したいですか？」という質問に、夫の多くが「妻と」と答えるが、多くの妻は「友達と」と答えるそうだ。それを知つて多くの夫は「あゝ、非情」と嘆くが、妻は「あゝ友情」と澄している。一般に男性は高齢になるにつれ、妻に擦り寄つ

てくる。これは必ずしも愛情からではない。生きる知恵だとも言わっている。妻の方は、子育てやら義父母の介護やら、あれこれ過去の苦勞があるから、それが不満でならない。まさに「夫のロマン、妻のフマン」なのかも。夫婦の時間が長くなつた現在、五十代六十年代の夫婦のあり方が非常に大切だと思う。しかし、この期間、夫達は会社人間（仕事人間）そして定年後も頑張らなくてはならない家庭が多く、家族のためと思ながら妻や家族の方まで気が回らず、その間に妻はすっかり「あきらめ」てしまうのが大方の図式のようだ。望ましいのは共通の趣味、特に健康によい適度の運動を共有する事が、このましいと考えます。望郷会の参加者も逐次高齢化の傾向にあり、ぜひ五十代六十代の夫婦の参加が望れます。札幌の新十津川郷友会（望郷会札幌支部）では、平成十五年より、一泊（サンヒルズ・サライ）で郷里新十津川パークゴルフ協会と交流の大会を開催しております。毎年受けている人間ドックでは、血圧がやや高い他は、糖尿病、痛風などの生活習慣病とは無

連絡先 電話

○一一一七六二一六七七九
○一一一八五五一三九〇四

故郷に感謝



札幌市(望郷会理事)

玉 堀 光 夫

健康自慢は聞かされたくないものの一つですが、私は敢て自分の健康自慢を、故郷への感謝の気持をこめて書きたいと思います。私は昭和七年生れで満七十三才ですが、中学生の頃から熱を出しこれ寝込んだことは一日もなく、風邪をひいても咳、鼻風邪程度で治ります。毎年受けている人間ドックでは、血圧がやや高い他は、糖尿病、痛風などの生活習慣病とは無

縁で、検査結果を見て医師に褒められます。歯も虫歯はありますがあまり自分の歯で、これも歯科医に全部自分の歯で、これも歯科医に褒められます。

小学校の同級生には「お前は百まで生きる」などと言つてからかわれています。

さて、母が末っ子の私に、「光夫はよくここまで丈夫に育つたものだ」、「子供は小さく生んで丈夫に育てるのが一番」と言つていたことを憶えています。

実は、私は早産児で未熟児、生れた時はあまりに小さく、作つた産着は着せられず、「もうすぐ死ぬから子供が生れたことは人に言うな」と言つていたと言います。その未熟児が、親の手厚い養育と、自分に生命力があつたのでよう。順調に育ち、先に書いたように健康な毎日を送っています。

では何故未熟児が七十三才の今日まで健康で生活できたのでしょうか。

私は、健康は最大の財産であり、自らの努力によつてのみ得られるものであることを自分に言い聞かせ、どれも当り前のことばかりですが、次のような健康法を実行し

ています。

先ず、早くから喫つた煙草は三十年間で止め、四十年間続けた晩酌も止めました。(来客、付き合い、宴会は別)。どちらも止めるには大変辛い思いをしましたが、今では快適な毎日で、止めて本当によかつたと思つています。

次に、三十年間続いている一日五十分のジヨギングで汗を流し、少々の読書と、新聞は二時間かけて隅々まで読み、日記も付けます。夏はゴルフ、冬は麻雀でストレス解消、三度の食事は腹八分目、間食を避け、野菜、魚を中心としたバランスのとれた食事(妻に感謝)をよく噛んで食べ、食後は必ず歯を磨く。物事にこだわらず、マイペースで過し、家に引籠らず、会合にはよく出かけ、人との付き合いを多く持つ。又、政治、経済などの社会の状況にも関心をもち、常に感謝の気持を忘れない、などを実行してきました。

このような生活をしていると、まるで仙人のようだと思われるかも知れませんが、継続は力、習慣になると楽しくなり、しない方が苦痛になります。

今思ひ返してみると、故郷、新十津川に生れ育つたことが今の健康の源であつたと思つています。橋本町の自宅から新十津川小学校まで毎日往復一時間。滝川中学、滝川高校へは往復二時間を十二年間毎歩き続け、自家用車はなく、バス、汽車にも滅多に乗ります。

でした。戦時下の小学生の頃は、学校から帰るとすぐ鞄を家の中に放り投げ、春、秋は、魚釣り、パッチ、釘さし、戦争ゴッコ、夏は川泳ぎ、冬はスキーと、遊びが中心で、家で勉強するのは、漢字の書き取り位でした。又、飴、お菓子、果物などの甘いものは口に入らず、おやつは、とうきび、いも、かぼちゃでした。

このような毎日の生活の中で、肥満児にならず、人間に必要な基礎体力が作られたものと思つています。今の子供は食べたいものは何でもあり、塾とテレビ付けの毎日、先が思いやられます。

そして今、「ゆとり重視」か「学力重視」かで教育論議が盛んですが、私は、教育は、「読み・書き・計算」、の基礎学力をしつかりと身につけ、自ら進んで勉強

する態度を養うこと、人間は生涯を通して勉強することが、大切なことと思つています。「学力重視」には賛成できません。

今、私は、毎日が遊びが中心であつた子供の頃を懐かしく思うと同時に、清く澄んだ、空氣と水、石狩川とピンネシリの雄大な自然、徳富川の清らかなせせらぎ、どこまでも続く田畑の中で生れ、育つたことも今日の健康の源と、故郷に深く感謝の気持を持ち続けています。

斯く言う私も、朝早く目が覚める、物忘れ、居眠り、目がかすみ、耳が遠くなり、同じこと何度も言う、すぐ腹を立てて大きな声を出し、皆に嫌われるなど、年相応の症状は現われています。

人間、生身の体、明日をも知れぬ身、そして一度しかない人生、生命ある限り、健康で明るく、楽しい、意義のある毎日を送りたいと思つています。

望郷会 深川



深川市（新十津川望郷会深川支部長）

杉 村 修

深川開拓の祖。貴族院議院 菊亭脩季侯爵が、没後百年にあたる

百年祭追悼式が深川市芽生神社境

内の菊亭侯爵碑（篆額は總理大臣

西園寺公望）前で行われ、地域

住民並に望郷会深川支部会員が参

列して偉大な功績を振り返りました。

菊亭侯爵は、奈良県十津川村より北海道に入植した祖先と大きな関係があります。

侯爵は、京都の藤原公卿の出で、

北辺の防備と北海道開拓に深く志

を樹て、明治二十四年石狩川、雨

竜川の未開の大原野を踏査し、地

認、開拓の大業を成し遂げようと、

明治十九年制定された北海道土地

払で規則により、国から六千四百

町歩を借り受け独立農場を経営す

ることになりました。

明治二十三年奈良県十津川村の

大水害により六百戸二千四百余人在新十津川村に入植、その実現を成功させた「東武」の手腕を見込んで、そのうち千六百町歩を委嘱し測量区割を行い、翌二十五年から十津川団体百戸の深川芽生地区への入植となりました。同時に、此の年、深川村設置が告示され開基の年となりました。『その時、私の祖父 杉村政常 十五歳と聞いております。十津川村は小原

新十津川村 下徳富下四号川一線に入地』

当時、菊亭侯と東武との間に交わされた契約は次の様なものでした。明治二十五・二十六年に、十津川、新十津川より百戸を募集し一戸につき十町歩を割いて、成功期限六年。契約に違反した場合、土地を没収し、共有財産とする。

しかし、入植者は開墾の困難があつて定着せず、より有利な条件の中を移動するものが多く、苦心したそうです。

明治三十三年までの開墾成功地は四千六百町歩となり、国はこれを侯爵に払い下げたが、侯爵は数年間に分譲し、自らの農場は数

たなかつた。明治三十七年には、学校、寺院、警察署等の敷地で、侯爵名で台帳上で残っていた土地を全て寄附してその名を惜しむことはしなかつた。

菊亭侯爵没後百年を数えるにあたり、現代に生きる者、その遺訓を迎ぎ、子々孫々に伝える責務を新たにし、郷土発展を誓つたところです。

ピンネシリ



旭川市（新十津川望郷会副会長）

上 杉 孝 儀

故郷を離れ旭川に居住してから、早二十数年が過ぎました。

「ふるさとは遠くにありて想うもの」との言葉を沁々味わっております。

妻に先立たれ独居生活の日々ですが、思い出しているのは、ピンネシリに抱かれて、橋本町、菊水町、花月の市街で暮した長かった日々の事であり、その一つひとつが胸の熱くなるような懐しい思い出となつております。なかなかずく

眼に浮かぶのは、西の空にくつきりと聳えているあのピンネシリです。更に徳富川の流れであり、橋本町市街のすぐ裏を流れる石狩川です。旭川で見る石狩川は、同じ川の上流、下流ではありますか、どうも受ける感じが違います。幼い時から夏はいつも泳いだり、魚釣りをしたりして、なじんだ川と老齢化して唯眺める川との違いでしようか。

ピンネシリは子供の頃から朝夕眺めて育つて來たし、成人してからも長い年月仰ぎ見て來ました。

ピンネシリに登りたい、頂上に立つて四方を見廻し、続く峰々、眼下の町や村を眺めてみたいという願望は早くから心の奥にありました。

四十年も前の頃だつたでしようか、青年団のピンネシリ登山隊に同行させて頂き、妻と共に大変苦しく辛い思いをしながらも、何とか頂上まで行きつく事ができました。頂上に立つて四方を眺めた壯観は、さわやかな感覚と共に今も心に残っております。とても嬉しい事でした。

新十津川を離れてから、年に何

度も故郷に行く事がありますが、その途中、深川を過ぎ車窓からピンネシリが見えるようになると、何か胸の中が暖かく故郷が近いと、いう懐しい気持になってしまいます。ピンネシリは町を離れた人々をはるか遠くから暖かく迎えてくれる母のような山だと思います。

自叙伝



札幌市(元・
さっぽろ大和会々長)

石本料詰

ガス燈が突然消えた・・・それが夜半より降り続けた豪雨と強風が重なり暴風雨で明け放しの玄関よりのせいであった。夜中十一時、外は雷雨と暴風の音のみ、母が気付いて起き上り私を起しに来た様子、私はすでに目がさめていた。

昭和十年八月私七才、盆も過ぎて蒸し熱い夜、まづ心配なのは一家を支える田畠の事であり洪水によつて収穫を目の前にて豊熟の稲の田圃がくづれ落ち尾白利川にのみ込まれる事だ・大事だ・母と私はガス燈を頼りに現場へと直

行、そこはすでに大雨によつて収穫を直前にした稲穂が後から後から地極絵の如く泥水の中へとくづれ落ちてゆく様を断腸の想いで母を見るしかすべがなかつた。当時は小作農でしたので総収穫の約四割を年貢米として地主に上納するのが決りであり、残りの米で自家米、出荷米、翌年の種糀として一ヶ年入人の家族を支える糧であれば子供心にも涙が止まる事なく忘れる事はなかつた。私の脳裏より走馬灯の如く幼少の一節として忘れぬ。(後で母よりの話では三年一度)の洪水であつたと洪水害が貧困の追い打ちをの時、地主長新平さんに数回頼み、その秋より河川の圃場のため水田の補墳の護岸工事が始りました。その時代は蛇籠に玉石を入れての旧来の工法でしたので約三年かかりました。これで田圃の洪水による決壊より免かれると思ひ家族一同安堵の想であつたが、勿し貧困の度合いが下つても上る事なく、当時の農業経営の宿命で四年に一度の凶作は必ずやつて来ました。凶作で年貢米を上納できぬと翌年に二年分とそれわそれわ大変な生活で僅か一

町五反の水田と少々の畠で生活を保つわけですから、それと耕地が水下故に隣地との水門の水争いが毎年の事。そして分水に夜通し立て水守をしてた母の事。その苦労を今でも心中に灌水争いの夢見る事あります。農業の余暇をさいては生活費の糧にと護岸工事の仕事にも雨の日、風の日も出てました。母はどんな貧困と斗い乍らも私共、子供には愚痴を一度も言つた事はない。酒好きな父は世間でいがあるで隣よりリヤカーを借りて雑貨店より斗亀で焼酒を付けて夜中に運んで縁の下に隠して母にかくれて小出しをして飲んでいた。又、生活苦故に父と母の夫婦げんかは年中で、酒乱もあつて母に暴力を、そして家具小物は「メッタ」壊し、私共は夜中に帰つての修羅場を布団より起き上り、只々見てるより仕方なく、そして父は家を出て一週間も二週間も帰らぬ事は年に何度も、でもどんなに暴れても私達子供には一度も手を出した事は無かつた。父も婿養子という立場で酒乱の癖もあり、親戚にも軽く想われた事も僻みで酒に溺れていたのかと私もこの年になり思

い当る事も・・・そんな生活が何年か続き、姉二人、私、妹達も小学校にと成長の過程でやや生活が定着したかに見えたが、決して表づら丈でした。一番上の姉が小学校三年の頃より、ご飯たき、台所一通りをやらされたそうです。小学校六年を卒業と同時に姉「冬香」は隣村の雨竜の農家に口べらしの為に子守に出され、つとめが辛くて夜中、尾白利川を渡つて素足で何度、逃げ帰つて来た事か。その度、つれ戻される姿を見て私は涙し乍ら貧困より抜け出す事を探つていた事か。次の姉「世津」は姉弟でも学校の成績も良く勉強大好きでした。ある朝、学校への時間が来ても泣きじやくつていてるので、どうしたと聞いても泣いている。・・・あとでわかつたが、母に学校に行くのなら妹「津代」を背負つて学校へ、それが否なら学校休めとの事。それでも泣き乍ら妹を背負つて登校される事が度々でした。母は幼い子供がいたら農作業に支障になるとの理由です。こゝで書き添えるが、私には兄二人と弟一人が生まれていたが、食生活、栄養失調、バラック同様の等々の

環境上で生まれて一週間か、永くて二年足らずで、風邪がこじれて肺炎を併発して病院代もなく三人共、幼くして他界され、私、男一人が育つた訳で、私も余程生命力に執着だつたのか・・・私は学校の一年生の頃より六年生頃迄、「矮鶴」と渾名を付け、呼ばれ、いやでした。私が、たしか小学三年の頃と思うが、夜中にトイレの途中、母は私達五人を寝付かせたあと寒い部屋で一人何日も帰つてこない父を嘆いてか、泣いてる母を見て「生活苦に病んでいる」な何度かも。霜月の経つのは早いもので一町余りの水田の収入で親子七人の生活は姉妹も大きく成長し依然として水飲み百姓の域を脱する事出来ずの毎日を過していた。或る日、志寸の十番の沢にいる辻の正美おじさんが朗報を持つて:土地は高台で瘦地だが耕地は今のが三倍の四町歩余りである。こゝにいても何時になつても貧乏より抜けんぞ。:知らぬ土地と隣人達の付合い、不安との日々が立ち、でも一丸と家族が力を合せれば、

必ず野望でも成就出来るとの確心を以つて、昭和十六年春、不安と期待に心を強くして、新十津川村上徳富三区高台に第二の生活の耕地を(地主・千葉チヨ)聖地と肝に銘じて頑張りました。勿し瘦地故に以前の反収の半分しか獲れず、決して豊かな暮しとは言えなかつた。昭和二十年春、私は両親に内緒で二十才の徵兵検査を待ちきれず海軍予科練に志願し一次合格で自宅に・・・そして母にばれて一人息子なのに世継ぎはどうする。何を考えているんだと姉「世津」に役場の兵事係に行つて断つて来いと意気まくり三日三晩泣き通しでした。その頃の思想教育がそうさせ國の為にとの一念でしたから、そんな事があつて数日後、母も正氣に戻り二次の合格を祝つてくれました。そして私の出征を祝福して親戚を集め立ち居振る舞をして頂きました。ところが幸か不幸か門出の二週間前に終戦になるなんて:耕地が多く人手の足りないのに母は私を農業実業青年学校に(毎日制)に通わせてくれました。

今、ふり返ると大変な決意だと思います。そして戦後を迎え「マツ

カーサー」の農地解放に依り耕地は手元に自作として確立した訳です。当時、几帳面な母は姉「世津」に日誌簿記を付けさせていたのを聞くと、米、野菜の自給を外して年間五〇〇円で生活した時代ですから今昔の感があります。確かにその頃でした役場に務めている徳田さんという方が私に村役場に入る様、何度も勧められましたが、母の心情を考える時役場に務める気にはなれませんでした。今想うとあの時に村役場に務めていたら私の人生も大きく变つていた事でしょう。母、昭和二十二年春雪どけの頃、風邪をひき、じつとしている性格、故野良に出て働き肺炎を併発してしまい:それ迄ランプの生活だつたのが戦後の復興で私共の田舎にも電気が灯もり、そして点灯一週間目で母はラジオもテレビも勿論みず、その秘十月二十八日苦労に苦労の人生を姉二人妹三人私と六人を遺して行年四十七才で終命「黄泉の旅立ち」となつた次第で、さぞ心遣りがあつた事だろうと:



平成16年度新十津川望郷会総会

平成16年6月20日午前9時30分、新十津川町農村環境改善センターにおいて平成16年度新十津川望郷会総会が開催されました。総会には、会員30名が出席し、山本敬一郎望郷会長のあいさつに続き、小畠莊一新十津川町長が歓迎のあいさつを述べました。

議事に入り山本会長を議長に選出し、議案の審議に入り、承認事項として平成15年度事業報告、決算報告並びに監査報告がなされ承認されました。続いて決議事項として平成16年度事業計画案、収支予算案の改正案が事務局の提案どおり可決されました。

総会終了後、午前10時から行われた戦没者、物故功労者、消防殉職者の追悼式が行われ、全員で黙祷を捧げた後、小畠莊一新十津川町長が式辞を、四釜隆遺族会長、杉本消防団長等らが追悼の辞を述べ、戦没者、物故功労者、消防殉職者に対し献花が行われました。

開町114年記念式典では、奈良県十津川村長更谷慈禧様、奈良県十津川村議會議長古久保勲様も出席され厳粛に式典は執り行われました。来賓や町民の代表者が祭壇に花束を捧げ全員で町民憲章を朗読し続いて植田満新十津川町助役による告諭奉読、笛木隆新十津川町教育長による碑文朗読が行われました。

来賓として、更谷慈禧十津川村長から祝辞を賜り、山本敬一郎新十津川望郷会長の万歳三唱で式典は締めくくられました。

平成16年度の新十津川町表彰贈呈では功労表彰（自治功労）として、高木富義様が受賞され、また、60年以上新十津川町に在住する満88歳の開拓功労者20名の方々に感謝状が手渡されました。

農村環境改善センターで行われた懇親会には、多くの方々にご出席を賜り、和やかな雰囲気のなか終了いたしました。



新十津川望郷会役員名簿

役職名	氏名	住所	電話番号	備考
顧問	小畠 莊一			町長
	松葉 孝文			町議会議長
会長	山本 敬一郎			砂川支部会長
副会長	安田 麻夫			
	高棹 政義			札幌花月会会长
	上杉 孝儀			
	丸谷 金保			
理事	前川 庄作			
	増谷 俊秀			郷友会中央会会长
	玉堀 光夫			郷友会中央会副会长
	和平 康伸			
	高桑 和行			さっぽろ大和会会长
	薮内 毅			さっぽろ吉野会会长
	岡田 功			札幌郷友会事務局長
	柳沢 隆義			
	薮内 英之			
	杉村 修			深川支部支部長
	辻本 弘道			留萌支部支部長
	谷口 次雄			釧路支部支部長
監査	上杉 天道			札幌郷友会相談役
	大久保 宗利			札幌郷友会監査
事務局長	植田 満			助役
事務局次長	佐川 純			教育長
	石田 賢吉			総務課長

編集後記

新十津川望郷会会報第七号を発刊するにあたり、役員並びに会員の皆様にはご投稿のご協力を賜り、心からお礼申し上げます。

来年の第九号の発行にあたり、多くのご投稿をお待ちしております。

(原稿用紙を送付させていただきますので、事務局まで電話等でご請求くださいますようお願い申し上げます。)

新十津川望郷会会報
第八号

二〇〇五年六月二十日発行

発行 新十津川望郷会

〒073-11103

新十津川町字中央30一番地1

新十津川町役場内

事務局長(新十津川町助役)

植田 満

印刷
留萌印刷株式会社

☎ 一二五ー七六一ー二三一